妖怪横丁の厄介者

灰野真央

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼太郎はある日、人間界で一人の子どもを見かける。かなり強い妖気を出している子どもに襲われた鬼太郎と猫娘。

だが、その子どもは何と、遠く北の地からやって来た流れ者の妖怪で……。

新しく妖怪横丁にやって来た厄介者の妖怪が、鬼太郎達と様々な事件を解決していく！

目次

出会い ―――― 1
鬼太郎との出会い ―――― 5

出会い

～鬼太郎視点～

ある日、僕がいつものように人間界を散歩していると、何処からか鼻がもげそうな程の異臭が漂ってきた。

『鬼太郎！　気を付けろ、とんでもなく強い妖気じゃ！』

「はい、父さん！」

僕は咄嗟に鼻をつまみ、足音を消して異臭のする方向へと向かった。薄暗い路地の奥に見えたのは、一人の子どもの背中。何やら見慣れない模様の着物を着ている。まさか、この異臭の原因はあの子どもなのか？

「父さん、あれは……？」

僕は頭上にいる父さんに聞いてみる。すると、父さんは小さく唸って言った。

『残念じゃが……ワシにも分からんのぅ……。妖気の強さから考えるに、相当の強者じゃろうが……』

父さんでも分からない妖怪がいるなんて……。ここは様子を見た方がいいのかも知れないな……。

その時、運悪く猫娘が僕らに声を掛けてきた。同じように鼻をつまんで、しかめ面をしている。
「鬼太郎！　何なの？このひどい匂い」
「シーッ！　向こうに気付かれる！」
僕が彼女を止めた時には既に遅く、子どもは身体をこちらに向けて僕らに襲いかかってきた。
「シャアアアアアッ!!」
「危ないっ！」
「きゃあっ!?」
僕は猫娘を突き飛ばして、そのまま子どもの体当たりをまともに食らってしまった。暫く地面を転がり、何とか止まったものの、全身の痛みが僕を襲う。
「く……っ」
「鬼太郎！」
猫娘は僕に駆け寄ろうとしたけれど、子どもは猫娘に向かって牙を剥いた。けれど、その姿は既に子どもではなく、巨大な大蛇だった。
ギラギラと不穏な光を宿す赤く縁取られた金色の目は、見る者の背筋を凍らせる。歪に口角を上げて笑う口から覗く鋭い牙は、鈍く光って不気味さを醸し出し、薄墨色の身

体を持っている。こいつは一体、何なんだ……!?
『鬼太郎、しっかりせい！　猫娘がやられてしまうぞ！』
「分かって、ます……！」
立ち上がろうとして足に力を入れる。けれど、立ち上がれなかった。まるで全身の力が抜けたみたいに、動けなくなった。猫娘は必死に応戦しているけれど、既に傷だらけだ。強すぎる……。
その時、異変を察知した八咫烏の群れが、僕らを包んで妖怪横丁へと運んでくれた。そいつは、その後をしつこく追いかけてくる。遂に妖怪横丁へと侵入し、どんどん僕らとの距離を詰めてくる。
『いかん！　このままでは、じきに追いつかれるぞ』
父さんの焦った声を聞いて、僕は必死に頭を動かす。あいつの弱点は何だ？　それさえ掴めれば、弱らせることだってできるだろう。考えろ、鬼太郎！
すると、下からおばばの声が聞こえてきた。
「侵入者め、この砂でも食らうが良い！」
『があぁぁぁぁ!?　砂、だと……!?』
壺をひっくり返す音と砂が流れ出る音がほぼ同時に聞こえ、大蛇の苦しむ気配がする。何か特製の砂でも使っているのだろう。みるみる大蛇の気配が離れていき、僕らは

間一髪のところで難を免れた。
　何とか家に辿り着き、一羽の八咫烏が妖怪横丁の妖怪達に治療を頼みに行ってくれた。すぐに一旦木綿や烏天狗などの妖怪達がやって来てくれて、僕らの傷を見てくれた。
「こりゃあ、ひどいな。相当な力で体当たりされたんだな、鬼太郎」
「ハハ、まぁね。ありがとう、烏天狗」
「いいってことよ。それよりも、さっきおばばが誰ぞに砂をかけていたが……あやつは何者だ？」
「それが……」
　言いかけたところで、僕の家の戸口に立った影があった。そちらを見ると。
「鬼太郎。入って良いかえ？」
「おばば？　……って、ええ!?」
　綱を持ったおばばと、人間界で見た子どもだった。

鬼太郎との出会い

〜オヤウ視点〜

俺は気付いたら砂まみれで地面に倒れていて、そこから婆さんに問答無用で縄で縛られて、ある家の前へと連れて来られた。その中にいたのは、左目を前髪で隠している茶髪の少年と、猫のように縦長の瞳孔を開いて警戒している少女だった。その他は、俺の知らない奴らばかり。

「鬼太郎。入っても良いかえ？」

「おばば？　……って、ええ!?」

茶髪の奴は俺を見て、驚いた様子で目を丸くしている。そうか、こいつは鬼太郎って言うのか……。

「こいつ、さっき人間界で見た奴よ！　今度こそ、ギタギタにしてやるんだから！」

『まぁまぁ落ち着け、猫娘。今は争わず、話す方が良い』

俺は、鬼太郎の頭からひょっこり覗いた目玉を見て、思わず後ずさった。

「な、何だよ、こいつ……！　目玉が喋りやがったぞ!?」

何がどうなってる？　俺の知ってる世界とは、まるっきり違う……。まさかこいつら

も、違う場所にいる精霊（カムイ）なのか……？

そんなことをグルグルと考えていると、婆さんは俺を卓の前に座らせて、何故ここに来たのかと問うた。

俺は、上手く説明できるかどうか分からない、と前置きを入れてから、説明を始めた。

俺は、元はここから遥か北の地に住んでいた。人間（アイヌ）達からは『オヤウカムイ』と呼ばれ、古くから恐れられてきた。ある湖の主として長い間君臨し、そこで悪業の限りを尽くした。

悪臭を出して人間（アイヌ）達を追いかけ回す。家畜や動物を殺す。草木や作物を枯らす。水（ワッカ）を穢す。精霊（カムイ）を殺したことだって何回かあった。

遂に、それを見かねたある英雄神二人が、俺を退治しにやって来た。

初めは俺は歯牙にもかけていなかった。どうせこいつらも、すぐに俺の悪臭に触れれば皮膚が焼け爛（ただ）れて重傷を負うか、死んでしまうに決まってる。そう思ってタカを括っていた。しかし、そいつらは俺の予想を遥かに裏切った。最初は俺の優勢だった。悪臭を振り撒き、二人の動きを止めてジワジワと皮膚を侵食させていく。ところが、そこで俺は気を緩めてしまった。途端に反撃に遭い、俺は蓬（よもぎ）の葉を擦り付けた矢を何本も受けて重傷を負い、終いには氷の精霊（カムイ）が助太刀に現れて雹を降らせた。俺の動きが鈍くなったところで、そいつらは肩から提げている刀（エムシ）を抜いて俺の身体を斬り刻み、再生できな

いように処理しやがった。
「どうだ？　オヤウカムイ。これに懲りたら、二度と悪さをするんじゃないぞ」
「……この……クソッタレがあぁぁぁぁぁぁっ!!!!」
　俺は最後の力を振り絞って牙を剥き、そいつの腕を噛みちぎろうとした。だが、その時には既に、俺の魂は天へと昇る為に身体を離れていた。
「離せっ！　せめてあいつの腕だけでも喰いちぎらせろ!!　そうでもしねぇと収まらねぇんだよぉっ!!」
　そんな俺の叫びも虚しく、遂に天界（カムイモシリ）へと帰ってきた俺は、すぐさま一人の子どもの肉体に魂を移されてそのまま人間界（アイヌモシリ）へと送られた。その時に言われたことは、たった一つ。
「償え。罪深き我らが同胞よ」
　詳しい方法も聞かされないまま、俺はあてもなく人間界（アイヌモシリ）をひたすら彷徨（さまよ）い、誰からも相手にされず、何かを手伝おうとしても気味悪がられ、避けられる日々を送っていた。苛立ちが募り、胸の内に溜まった黒い塊を吐き出せないまま、ただ空虚な毎日を過ごしていたのだ。
「……で、あんたらがたまたま見えたもんだから、八つ当たりっつーか、何つーか……。とにかく、悪かった。この通りだ」

俺は一通りの説明を終えて、鬼太郎に向かって深く頭を下げた。
今更謝っても、許しちゃくれないだろうな……。半分諦めかけていた時、鬼太郎が俺の肩を叩いてくれた。
顔を上げると、鬼太郎は笑って頷き、こんな提案をした。
「君の抱えてる事情は分かった。これからは、ここで僕達と一緒に人間達を助けていこう。妖怪に襲われてる人間達を、僕らが助けるんだ」
急に提案された内容が一瞬理解できず、俺は怪訝な顔を鬼太郎に向ける。周りの奴らも、ウンウンと頷いている。どうやら、俺はここでは嫌われてはいないようだ。だが……。
「俺の……この悪臭はどうするんだ?」
何気なく口に出した疑問に、婆さんが俺に小袋を渡してくれた。
「これは……?」
「おばば特製の砂じゃよ。これを腰に下げておけば、お前さんの匂いも軽くなるじゃろうて」
ニヤリと笑った婆さんは、鬼太郎に向かって頷く。
鬼太郎は俺に手を差し出して言った。
「僕はゲゲゲの鬼太郎。幽霊族の唯一の生き残りだよ。そして、ここは妖怪横丁。色ん

な妖怪達が住んでいる町なんだ。これから宜しくね、オヤウカムイ」
「いい、のか？　こんな俺でも……？」
「いいんだよ。妖怪でも人間でも、困ってたら放っておけないんだ」
困ったように笑った鬼太郎を見て、俺はこいつを信用できると判断した。
それでも、あまり人間（アイヌ）に触れたことがない俺は、恐る恐る右手を出して鬼太郎と握手を交わした。
『良かったのぅ、鬼太郎。これでまた、心強い味方が増えた訳じゃ。めでたいから、酒でも出して振る舞ってやれ』
「はい、父さん。今持ってきますね」
この一言で、鬼太郎の家の中がパッと明るくなった。場所は違えど、やはり酒好きは多いらしい。
『なぁ、オヤウ。ワシは目玉オヤジと言うんじゃ。こう見えても、立派に鬼太郎の父親じゃぞ。えっへん！　そういうことで、よろしく頼むぞ！』
「あ、あぁ……そうですかい。こりゃまた、奇妙な親で……。まぁ……これから、宜しくお願いします……」
目玉オヤジを皮切りに、猫娘、烏天狗、砂かけ婆、子泣き爺、ヌリカベ、一旦木綿など、たくさんの妖怪達が俺に自己紹介をした。一度に入ってくる情報の量が多すぎるの

と、久しぶりに本来の姿に戻ったのと、今まで溜め込んでいた疲労が蓄積していたことが重なり、急激に俺の意識は闇の中へと落ちていったーー。